

# 国民経済の総体把握のための経済学構想を求めて —— G.シュモラー、W.ゾンバルト、E.ザリーン ——

関西学院大学経済学部 原田ゼミ3回生（第6期生）

小笠原彩華(ゼミ長)・折戸はるか・渡部舜・天野大輝

2020年10/10 京都大学経済学部竹澤ゼミとの合同ゼミにて（オンラインによる）

## 目次

はじめに

第1章 シュモラーによる文化と社会の経済学と発展段階論

第1節 文化と社会の経済学

第2節 発展段階論

第2章 ゾンバルトによる「経済システム」把握

第3章 ザリーンによる「直観的理論」構想

第1節 シュテファン・ゲオルゲの影響

第2節 「直観的理論」の構想

むすび

## はじめに

経済のグローバル化が進むとはいえ、いやグローバル化だからこそ、海外の異文化圏の人々との経済的なやり取りをする際それぞれの国民の歴史的に培われた文化・慣習・宗教・倫理の違いに直面するものである。2010年を過ぎた頃ユニクロがバングラデシュに（製造ではなく）販売・出店のために進出しようとしたら、女性があの定番のTシャツを——価格を下げても——買おうとしないという、予想しなかった事態が生じた。担当の社員が調べていくと、イスラム教の影響の強いバングラデシュでは、女性はあのように肌を露出するシャツは外では恥ずかしくて着ることができない、ということが分かった。彼女らにはイスラム的な民族服を着て外出する慣習があり、その民族服は少しモダンなデザインを帯びたものでも良いが、完全にモダンでラフなあのTシャツは着られない、着ようと思わないのである<sup>1</sup>。

他方、経済学は現在のミクロ・マクロ理論において、とりわけ数学を多用するミクロ理論においては、個々人の数量的な利益極大化行動にそぐわない慣習・宗教といった要因は「与件」として理論的把握からできるだけ排除しようとする傾向がある。では、そもそもそうした国民・民族に特有の精神的・慣習的な意識があることを最初から組み入れた経済学といったものは、ありえないのか？ これを探っていくと、そうした試みが19世紀中頃から20世紀前半まで続くドイツの歴史学派の経済学においてなされていたことが分かるのである。「倫理的側面」<sup>2</sup>を経済学に入れた新歴史学派のグスタフ・シュモラーや、その後の最新歴史学派のヴェルナー・ゾンバルトやエトガー・ザリーンにそれは見られる。なので、以下でそれらを明らかにして、考察したい<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> NHK 2013 参照。

<sup>2</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）43頁。

以下も邦訳を使う箇所ではこのように示す。つまり、著者名のあとに原書の年を書き、その直後に（ ）で訳者名を書いて、最後に訳本のページ数を「43頁」と記す。なお、邦訳の日本語が古い場合は「 」で引用するときも文章のみは現代日本語にする。

<sup>3</sup> 原田 2008、168-185頁参照。

# 第1章 シュモラーによる文化と社会の経済学と発展段階論

## 第1節 文化と社会の経済学

グスタフ・シュモラー（1838～1917年）は19世紀後半から20世紀初頭に活躍した経済学者であり、当時はドイツ統一に向けてビスマルクなどが台頭した時代であった。シュモラーの功績としては、国民経済の風習および法に対する関係について、新しい別の観点を打ち出したことにある。この「新しい見方」を「倫理的 *ethische*」<sup>4</sup>な観点と名付けた<sup>5</sup>。

「旧経済学はしばしば一般に国民経済、国民資本、国民所得は存在せず、ただ個別経済、個別的な資本および所得があるのみであると主張した。たしかに、そのこと誤りである。[...] イギリスの国民経済、ドイツの国民経済 […その他日本の国民経済など] は単に同一の国家的領域における、また同一の国家権力のもとにおける個別経済の総合といった [単純な] ものではない。[...] その諸部分はあらゆる関係において他の国家または民族の個別経済との相互作用に在るのとは互いに異なる相互作用にあるひとつの統一的な全体を総括する名称である。[...] すなわち言語、歴史、記憶、風習、観念の共通である。」<sup>6</sup>

それはひとつの共通の観念が国民経済を支配しているともいえる。一致する心理基礎よりできた客観的になった共通の生活秩序である。「ギリシャ人が風習および法に結晶した風習的=精神的共同意識と名付けたような共通のエトスであり、人間のあらゆる行為、したがって経済的行為に影響するところのものである」<sup>7</sup>。

シュモラーにしてみれば、彼の時代に「経済的行為はそれが技術的であるがゆえに、倫理的観点は入らないということが主張されている」が、それに対して反論すべきだとして、彼は次のように言った。「最も簡単な技術的労働といっても合目的であり組織的でなければならない」<sup>8</sup>。その技術的労働、単なる自然力、単なる必要は一時的なものであるとして、これに反して今日の労働の概念は、純個人的労働のものでも風習的内容を有している、と彼は主張している。我々は何か人間的目的（本能・衝動）の体系の裏に権利があるものに

<sup>4</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）、41頁。

<sup>5</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）、41頁参照。

<sup>6</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）、41-42頁。[ ] は引用者による省略または追加。

<sup>7</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）、42頁。

<sup>8</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）、42頁。

関して永久的努力をもって働くことに努める。我々の社会的組織の基礎として当てはまる限り、特定の意味において自己目的になっている、そういう理性的な自己活動を労働と称している。「したがって、そうしてあらゆる個人的経済的活動はその技術的側面と共に倫理的側面を欠いてはいない」<sup>9</sup>。ここで繰り返し、次のように言われる。

「国民経済学は技術学ではないと主張されている。それは主として個別経済相互およびその全体への関係を研究する。[...]そしてそこでは、風習および法により、エトスにより、はじめて一定の色彩、形態または傾向を受け取るところの純粋な行為が取り扱われる」<sup>10</sup>。

経済的生活は何事も例外なく自然の衝動や欲望から始まるものであり、純自然的なものとして始まる。「だがどこにおいても純自然的=技術的なものにとどまっていることはない。なぜなら生まれながらの風習的感情、審美的欲望および理智は、あらゆる自然的行為を把握し改革するからである。」<sup>11</sup>それには最も野蛮な種族においてすらそうであり、動物すら単なる暴力より特定の秩序をより高くおく。例えば、人間は食欲を満たすために好き勝手に食事をとったりはしない。社会的な明示的・暗黙的な規制にのっとりながら、時間的・空間的な制約を受けて、そして礼儀作法にしたがって食事をとる。つまり、食欲という利己的本能・衝動を儀式化し、修正することで社会生活が営まれているのである。これと同様に、寒さは人に服を着させることを必要とさせ、風習により衣服が生み出され、流行によってあらゆるより程度の高い高尚な消費を作り出す。このように、「確固たる風習なくしては、何の市場もなく、何の交換もなく、何の貨幣流通もなく、何の分業もなく、何のカーストもなく、何の奴隷もなく、何の国家制度もない。」<sup>12</sup>

そして最後にシュモラーは国民経済を内包する存在、その倫理的観点をこう表現して締めくくった。

「多数者相互の平和な教化のある人間的関係は、ある一定、相互の理解と承認とがなければ可能ではない。この承認は当事者に対する、すなわち全体に対する精神的紐帯をかたちづくる。それは代々伝えられて確固たる形態を生む。[...] あらゆる風習は

---

<sup>9</sup> シュモラー1874-75 (戸田訳)、43頁。

<sup>10</sup> シュモラー1874-75 (戸田訳)、42-43頁参照。

<sup>11</sup> シュモラー1874-75 (戸田訳)、43頁。

<sup>12</sup> シュモラー1874-75 (戸田訳)、44-45頁。

粗末な自然人の激情と出来心とのはたらきに対して対立している。風習はあらゆる自然的事象を束ね、それに確固たる姿態を与える。[...] その風習は先天的なものではなく、生成したものであり、不断の変革と純化の過程に投げられている。[...] その風習によって人間は自然のなかに第2の世界たる「文化の世界」を建築する。こうして国民経済もまた、この文化の世界に属するのである。」<sup>13</sup>

彼の時代に技術的側面では捉えられていなかった経済学に対して、シュモラーが倫理的観点を持ち込んだことで大きくその幅が広がったように感じる。実際の経済活動は単純な損得勘定だけで行われているわけではなく、それらを超越、内包した国ごとに存在する「文化の世界」に基づいて経済活動が行われているということが分かった。また、「はじめに」の部分で、「個々人の数量的な利益極大化行動にそぐわない慣習・宗教といった要因は「与件」として理論的把握からできるだけ排除しようとする傾向がある」と述べたが、もはや文化の世界を「与件」として扱っては、爆発的な速度で国家ごとに独自の形で進化している国民経済を捉えることはできないように思える。そこでシュモラーが打ち出した倫理的観点、「文化の世界」のなかの国民経済という観点の功績は大きなものとして捉えることができるだろう。

## 第2節 発展段階論

1600年代から1700年代の経済政策における主な考えは重商主義であった。しかし歴史のある時代全体を特徴づけるには、これをその前と後の時代とを比較することが必要であり、それにより「大きな経済的発展過程の一環」<sup>14</sup>として理解することが必要である。とはいえ、重商主義の特徴づけにおいての手がかりを部分的認識（牧畜、農業など）に求めるのは誤りであり、重要なのは、つまり国民の経済、社会、政治との諸関連とそれらの諸制度である<sup>15</sup>。

というのも、人々は常に何らかの「政治機関」<sup>16</sup>が上位に立つ行政体に所属しており、そして人々は政治機関を通じて自分たちの経済生活や組織の制度を管理し、また構成員もそ

---

<sup>13</sup> シュモラー1874-75（戸田訳）、44頁。

<sup>14</sup> シュモラー1884（正木訳）、7頁。

<sup>15</sup> シュモラー1884（正木訳）、8頁。

<sup>16</sup> シュモラー1884（正木訳）、9頁。

の地域の経済諸力増強に努め、構成員全体の経済的福利の増大を目指してきた<sup>17</sup>。つまり政治団体にコントロールされた経済領域は時代を追うごとに空間的に拡大していくということである<sup>18</sup>。

シュモラーはここで発展段階論を、1. 村落経済、2. 都市経済、3. 領邦経済、4. 国民経済の4つに分け、これら諸段階を経て発展していくと述べた。もちろんこれら全てに各個人や各家庭には独立の地位は残されているが<sup>19</sup>、これらのいずれかが台頭するかによってその特質は語られる。またその移行については、下位の複数の同様の経済団体が存在し、経済単位で競合するなかで有力なものが他のものを統合し、規模が拡大するなかで次の段階に進む。その際重要なのは行政機関と制度であり、なぜならそれらをベースに我々の慣習や文化は作られ、経済生活も同様に成り立っているからである<sup>20</sup>。

これら諸段階を順に見ていく。1. 村落経済では産物は共産的な管理下にあった。また共同体外との交通はほとんど不可能であった<sup>21</sup>。2. 都市経済では財政と経済は同一であり、市民は永久に結合せる統一体であり、経済政策は排他的であった<sup>22</sup>。3. 領邦経済では権力が政府に移行、立法行為に着手した。また貿易も一層自由化した<sup>23</sup>。4. 国民経済では言語や文学等の国民精神に目覚め、国家の財政は政治と経済の中間に、制度もできるだけ統合し、大規模の人々を経済生活に巻き込んだ<sup>24</sup>。

以上のようなシュモラーの議論は国民経済をプロイセン中心のドイツ統一のプロセスに重ね合わせて、プロイセンの伝統（官僚による政策）を肯定するものでもあった<sup>25</sup>。言い換えると、シュモラーがプロイセン賛美的な考えに到ったのは、プロイセンがドイツ一帯に乱立していた小国を統一させ、かつ国民経済のレベルまで押し上げたことを、事実とし

---

<sup>17</sup> 原田 2008、172 頁参照。

<sup>18</sup> 田村 1986、75-76 頁参照。

<sup>19</sup> シュモラー1884（正木訳）、9 頁。

<sup>20</sup> 原田 2012、106-107 頁参照。

<sup>21</sup> シュモラー1884（正木訳）、10-11 頁参照。

<sup>22</sup> シュモラー1884（正木訳）、12-22 頁参照。

<sup>23</sup> シュモラー1884（正木訳）、23-50 頁参照。

<sup>24</sup> シュモラー1884（正木訳）、50-56 頁参照。

<sup>25</sup> 原田 2008、171 頁参照。

て叙述したのみならず、高く評価したからである。また、社会政策提唱者としてのシュモラーは、不労所得の排除と所得の再配分などを提言して労働者問題の解決にも尽力した際、かつてのプロイセン国王の啓蒙専制君主フリードリヒ 2 世の「君主は国家第一の僕（しもべ）」と言った信条が社会政策にふさわしいと考えて、よりプロイセン賛美へと至ったのである。シュモラーの議論がプロイセン寄りであり、そうした価値判断を経済学の前提としてもよいのかという疑問は当然存在し、後年にはマックス・ヴェーバー（1864～1920 年）がその点を批判的に捉えて、経済学・社会科学の客観性を主張している<sup>26</sup>。

## 第 2 章 ゾンバルトによる「経済システム」把握

はじめに、ヴェルナー・ゾンバルト（1863～1941 年）は経済システムの把握を試みるにあたり、その出発点として従来の体系化に関する分析からはじめている。まず、国民経済という形式的原理に基づく体系化について論じている。「国民経済の理念が実際に経済科学的考察にとって極めて有益であり、まさに不可欠なものであるのは疑う余地がない。」<sup>27</sup>にもかかわらず、それがわずかにしか発展させられていないことを、彼は、遺憾であると言う。「一定の国民全体の内部における個々の経済の社会的結合」<sup>28</sup>が重要であり、多くの経済学者はそれを解明すべきであるが、「こうした結合体がどのような性質のものなのか明らかにされないままだからである。」<sup>29</sup>このように、「国民経済の理念」と「個々の経済の社会的結合」の解明は、未発達な部分といえる<sup>30</sup>。

次に生産の状態による体系化について言及する。古くはアリストテレスからアダム・スミス、フリードリヒ・リストなどが各時代における支配的な生産傾向に従って経済を区別してきた。そして、ゾンバルトはこの分類方式を最終的に十分に完成させたグスタフ・シェーンベルク（1839～1908 年）の発展段階論を取り上げている。

「1. 狩猟民族、2. 漁猟民族、3. 牧畜民族、4. 定住的な農耕民族、5. 商工業民

---

<sup>26</sup> 原田 2012、112-113 頁参照。

<sup>27</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、I、122 頁。

<sup>28</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、I、122-123 頁。

<sup>29</sup> 原田 2011、60 頁。

<sup>30</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、I、120-124 頁。

族、6. 産業民族がそれである。[加えて]「労働、自然、および資本 […] という三つの生産要因の各々が財の生産にどのような比率で参加させられているか」という歴史的な観点において、個々の類型を本質的に特徴づけている。」<sup>31</sup>

ゾンバルトはこれを「その叙述が、様々な経済の特徴についてこれまで言われてきた事柄の最良のものを含んでいる。」<sup>32</sup>と高く評価しているが、完全な経済システムの把握ではないとしている。彼は後述であるように、経済は精神、形態、技術の三要素によって構成されているとしている。シェーンベルクの発展段階論はこのうちの形態と技術の面を素晴らしく取り入れているが、ゾンバルトが最重要視する精神を含んでいないとしている<sup>33</sup>。

最後に、販路の長さによる体系化を試みたカール・ビュヒャー(1847～1930年)についてより批判的に述べている。ビュヒャーは生産物が消費者に到るまでの販路の長さにより、経済の発展段階を捉えることができるとした。しかし、ゾンバルトは過去と現在の販路距離に変化がない財(例えば銀など)が存在することや同じ財においても生産者により販路が変わることをあげ、この理論は全く支持できないとしている<sup>34</sup>。

以上のような分析を試みたゾンバルトは、自身による経済生活の全体を包摂した体系化を目指すにあたり次のように述べている。

「経済の理念は時空を超えた理性概念である。しかし、経済生活という意味では経済は時間的・空間的に拘束された現実的複合体に他ならない。[つまり]抽象的な経済が存在するのではなく、常にただ全く特定の性質を備えた歴史的に特殊な経済が存在するのである。かくしてあらゆる文化科学の課題は、その科学によって取り扱われる文化現象を、その歴史的な特殊性において把握するための手段と方法とを発見することである。」<sup>35</sup>

ゾンバルトによると、経済は先にも述べたように経済志向、形態、技術の三層で構成されており、それらによって経済の特殊性は規定されるとしている。経済志向とは経済を行っている人々それぞれの主観的な精神である。形態とはそれぞれの主観的な精神を導く

---

<sup>31</sup> ゾンバルト 1927 (向井・吉筋訳)、I、126 頁。

<sup>32</sup> ゾンバルト 1927 (向井・吉筋訳)、I、129 頁。

<sup>33</sup> 原田 2011、61-62 頁参照。

<sup>34</sup> ゾンバルト 1927 (向井・吉筋訳)、I、131-133 頁参照。

<sup>35</sup> ゾンバルト 1927 (向井・吉筋訳)、I、118-119 頁

客観化された計画（秩序）である。最後に、技術とは経済生活における物財調達の手段あるいは手法である。そして、この三層は、そこに含まれる下位の様々な対立する事柄によって、より詳細に規定されている<sup>36</sup>。

まずは経済志向である。人々が経済生活を送るにあたり、その目標は一定の欲求を満たすことにあるかより多くの利潤を獲得することにあるかに分類できる。前者の場合は「欲求充当原則」であり、後者は「営利原則」である。そして、次は先に述べた目標をどのようにして目指すかである。これまでの長きに渡って伝承されてきた様式を選択する場合は「伝統主義的」であり、それに対して批判的な態度で検討し、それが合目的性の要求を満たさない場合に拒絶することを「合理主義的」である。最後に、経済生活における人々の相互関係について言及している。人々がそれぞれの利己心を優先する場合は「個人主義的」であるし、他人や所属する共同体の利害をも考慮している場合は「連帯主義的」である<sup>37</sup>。

次に、形態について詳細に規定している。まずは経済生活にあたり、無秩序な状況下であることはなく、何らかの規制が定められている。それが「拘束的」であるか「自由」であるかである。前者は人々の全ての経済活動を法的、慣習的に定め、後者はある特定の禁止行為のみの制限を行う。そして、その経済生活に関する規制を定める主体が少数の場合は「貴族主義的」であり、大多数による場合は「民主主義的」である。次に経済生活の重心についてである。それが個々人にある場合は「私経済的」であるし、何らかの集合体にある場合は「共同経済的」である。次に、生産活動が「閉鎖的」であるか「開放的」であるかである。前者の場合は分業がなされていないので職業の専門化は成し得ないとし、後者は成し得る状態である。また、経済全体として財の生産が消費財として行われている場合は「欲求充当経済」であるし、交換財としての場合は「流通経済」と言える。そして、最後に経済が「個別的経営」によって行われているか「社会的経営」によって行われているかに分類できる<sup>38</sup>。

最後に、技術に関して述べている。まずは技術そのものが「経験的」なものであるのか、「科学的」なものであるのかである。そして、技術が原則的な変化を見せることが稀な場

---

<sup>36</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、I、112-113 頁参照。

<sup>37</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、II、96-99 頁参照。

<sup>38</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、II、99-102 頁参照。

合は「定常的」であるし、頻繁な変化を見せる場合は「革新的」である。最後に、その技術が有機物（植物、動物、人間）を利用する場合は「有機的」であるし、そうでない場合は「機械的・無機的」である<sup>39</sup>。

ゾンバルトの体系化の特徴は、これまでの経済学者が成し得なかった経済志向と形態や技術を融合し、文化的側面において国民経済の性質を総合的に導き出している点である。そして、それは原生種族的な経済や村落経済から資本主義経済や社会主義経済といった歴史上のあらゆる経済体制を認識でき、私は更に現存する経済体制の変化や新たに出現する経済体制さえ捉えることができるのではないかと考えている。ゾンバルトによるこの体系化はまさしく現代にも通ずる経済システムの把握と言えるだろう。そして、その所以は経済生活の根幹である人々の精神を最も重要視した上で体系化を試みたからである<sup>40</sup>。

### 第3章 ザリーンによる「直観的理論」構想

#### 第1節 シュテファン・ゲオルゲの影響

エトガー・ザリーン（1892～1974年）は詩人シュテファン・ゲオルゲ（1868～1933年）から精神・思想の面において多大な影響を受けている。2人はハイデルベルクで出会った。ザリーン自身は第一次世界大戦で戦傷を負っており、ゲオルゲは戦争に反対する立場であった。まずゲオルゲについて、次にザリーンの受けた影響について述べる。

ゲオルゲは1868年にライン河畔のビューデスハイムに生まれる。この川のもつ国際性はゲオルゲの精神形成に大きく作用し、ひろいヨーロッパ文化圏の詩人たらしめた。1892年『芸術草紙』を創刊し、ゲオルゲ派のいしづえを築く。彼の思想は民族主義的な要素もあり、ナチスは大いに利用しようとしたが、それを察した彼はスイスに移住し、そこで亡くなる。主著に『魂の四季』（1897年）、『生の絨毯』（1900年）、『盟約の星』（1914年）などがある<sup>41</sup>。

ゲオルゲは人文諸科学に影響を与え、ヒトラーの暗殺計画実行者であるクラウス・フォン・シュタウフェンベルク（1907～1944年）にも精神的な影響を与えた。ゲオルゲ=クライスという彼を中心とした支持者たちの集団が存在し、ザリーンのほかにも文学史家のフ

---

<sup>39</sup> ゾンバルト 1927（向井・吉筋訳）、II、103-104頁参照。

<sup>40</sup> 原田 2011、57頁参照。

<sup>41</sup> 西田英樹 1993、130-138頁参照。

リードリヒ・グンドルフ (1880～1931 年) や哲学者のエーディト・ラントマン (1877～1951 年) らが所属していた。彼らは、ブルジョワ的な特質と帝国ドイツの権力政策とに反発し、ドイツの文化遺産を誇りに思うと同時にそれを刷新しようとも考えていた。また、なかでもザリーンはゲオルゲに熱狂し、崇拝していた。ただし、ゲオルゲはザリーンについての評価を保留していた。グンドルフはこの2者の間に入って、仲介していた<sup>42</sup>。

現代の日本から見ればかなり先駆的とも考えられるが、ザリーンはすでに原子力を産業のなかで活用することに懸念を示している。その理由について以下のように述べている。

「今や、想像の諸要素は人間によって、すなわち強靱な知力のみ駆使するが信仰も責任感もともなわないような貧弱な世代によって見いだされ、手中に収められた。

「[...] 道具としての技術は王笏のような技術へと、奴隷に加える鞭へと姿を変えていった」<sup>43</sup>。

ザリーンは手段と目的が反対になることや、歴史のなかで形成された技術を無責任に使用することに強い嫌悪感を示している。ここからはゲオルゲの戦争に反対する姿勢の影響が感じられる。

また、封建制から資本制への進化に関するアダム・スミスの説明がある。そこでは「ものを満たすのと引き換えに、彼らは徐々に自分たちの力と権威のすべてを手放してしまった。[...] 自分たちの利益だけを考えて…行動したにすぎない。」<sup>44</sup>つまり、スミスが描いた発展では、自己中心的な考え、文化や慣習を考慮していない考えへと至ってしまうが、それへの批判は「直観的」な構想の例として古くから (中世から) あった。ゲオルゲやザリーンの時代になって突如現れた思想でないことを、彼らは示そうとしている<sup>45</sup>。

ザリーンの直観的理論とその3つの段階については次節で述べるが、その第2段階、第3段階でゲオルゲによる影響を強く受けている。そもそも精神や理想を最上位に据え、その手前には文化や慣習をおいている点はゲオルゲが詩人としてドイツの精神を重要視し、文化遺産を誇りに思っていることからわかる。機械化や環境破壊に対してははっきりと反

---

<sup>42</sup> シェフォールト 2007 (原田訳)、104-108 頁参照。

<sup>43</sup> シェフォールト 2007 (原田訳)、115 頁。

<sup>44</sup> シェフォールト 2007 (原田訳)、119 頁。

<sup>45</sup> シェフォールト 2007 (原田訳)、118-120 頁参照。

対の立場を示していることも共通している。つまり、ゲオルゲからはいくつもの面から影響を受け、ザリーンはそれをもとに彼独自の理論である直観的理論を構想していった<sup>46</sup>。

## 第2節 「直観的理論」の構想

ザリーンは様々な対立があるものの、全体を包摂するような理論がないという認識、自らがこれまでの経済学史をまとめ上げなければならないという思いから「直観的理論」を構想するに至っている。ザリーンの直観的理論は3段階に分けて捉えることができる。第1段階では直観的認識は単純な合理的認識と対立・併存する。第2段階では歴史をもとにした文化や慣習のある社会は超経済的な容器に納まっている全体として国民経済が認識され、第1段階における対立は解消され、総体認識によって部分認識は包摂される。第3段階では文化や慣習に加え、規範や理想、倫理といった価値判断が認識される。特にこの第3段階は重要であり、ザリーンが構想する中でも意識されている<sup>47</sup>。

まず、ザリーンは重商主義と重農主義に始まる対立を検証している。1. 普遍主義-個別主義、2. 動態-静態、3. 文化科学-自然科学、4. 形成態-結合態、5. 直観的-合理的<sup>48</sup>、という5つの観点からみている。なお、下記に図として挙げているものはこれらを表にしたものである。一見バラバラに見える対立を総括していく過程がみられる。これらの対立は2つの違った種類の理論の型を求めた結果、生まれたものとザリーンは考えた。とくに5つ目の直観的-合理的は同じゲオルゲ=クライスのメンバーであったラントマンの『認識の超越』（1923年）での認識論である。直観的理論は合理的理論を包含し、「直観的理論は合理的認識を与えるだけでなく、感覺的認識、全体性認識、本質認識を与える」<sup>49</sup>とした<sup>50</sup>。

---

<sup>46</sup> シェフォールト 2007（原田訳）、104-118 頁参照。

<sup>47</sup> 原田 2013、164-168 頁参照。

<sup>48</sup> それぞれ、①シュパン、②ゾンバルトその他、③ゾンバルト、④ハルムスの研究からザリーンは視点を得ている。また、シュパンはオーストリアの社会学者、経済学者、哲学者で、全体は部分に先行し、部分は全体によって生命を与えられていると主張した。ハルムスはドイツの経済学者で世界経済学の創始者とみなされており、世界経済自体にも統一的な主体性を認める立場をとり、国際分業の考えを否定した。世界経済の構造変動という概念も彼が初めて意識的に用いたものである。

<sup>49</sup> ザーリン 1929（高島訳）、133 頁。

<sup>50</sup> ザーリン 1929（高島訳）、127-135 頁；原田 2013、159 頁参照。

では、なぜザリーンは直観的構想を完成させようとしたのか、それはこれまでの研究では不十分であると彼は考えているからだ。例えば、限界効用論は正確な準数学的定式化としているが、「歴史的勢力の単純な存在に一瞥をも与えない」<sup>51</sup>としている。シュモラーはそれを抽象的、合理主義的であって、「非直観的に、非歴史的に、個人主義的」<sup>52</sup>であると否定的に評価している。ウェーバーは特殊科学の分離を認めたことによって、「ただ社会経済学なる覆いによって総括されているにすぎない」<sup>53</sup>とされた。ゾンバルトには初めて歴史の「理論的仕上げと直観的一体系的総括」<sup>54</sup>とを果たしたと一定の評価を与えた。しかし、国民経済学の課題が終結したのではなく、「自製の概念網を張り巡らそう」<sup>55</sup>としたとされた。このように、未だ解決されない国民経済学、経済の比較形態学、総観的社会学という3つを緊急な課題とした<sup>56</sup>。

ザリーンはゲオルゲ=クライスに限らず、多くの分野の人物と人脈を築き、多くの視点から物事を観察している。そのため、先ほどのラントマンのような哲学者から、また文学者からも影響を受けている。この経済学者などに限らない学際的な観点によって直観的理論は経済学ではしばしば無視される文化や慣習、倫理や精神といった要素まで含まれている理論を構想することができた。対立関係にあるように見えるものを、始めからどちらが正しいかという視点で観察するのではなく、まずどこに本来の差異を見るべきかに注目し、次にどの型が優れていると認めるべきであるかを決定するとしている。このように、直観的理論は多数の観点から構築されることによって合理的というレベルではなく、精神まで含んだ理論が構想された<sup>57</sup>。

経済学の歴史のなかでは経済をより正確に捉えようと様々な試みがなされてきたし、今もなされている。そのなかでは、人の合理的ではない部分、例えば文化、慣習、精神などはたびたび無視されている。しかしザリーンはその合理的ではない部分も含めて経済を捉

---

<sup>51</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、230 頁。

<sup>52</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、232 頁。

<sup>53</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、239 頁。

<sup>54</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、239-240 頁。

<sup>55</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、242 頁。

<sup>56</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、226-246 頁参照。

<sup>57</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、127-128 頁参照。

えようとした。そこでは「超経済的容器」<sup>58</sup>という概念はまさにすべてを包容する表現であるとする。ザリーンはこれまでの経済学史をまとめ上げようとし、結果的にも私たちに偉大な影響を遺している。私たちは、経済学に限らず、何事においてもこのザリーンの考え、すべてを包容する概念と優劣から入らない視点は生かされるべきであると感じる。

総合的な経済学		分析的な狭い経済学
重商主義	↔	重農主義
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">           ガリアーニ マルサス             ミュラー リスト             ゾンバルト シュピートホフ ゴットル         </div>	↔	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">           ケネー リカード パレート         </div>
普遍主義	↔	個別主義
動態	↔	静態
文化科学	↔	自然科学
形成態	↔	結合態
直観的	↔	合理的

## むすび

これまでは3人の経済学者による文化的な側面を取り入れた構想について見てきた。ここでは改めてそれぞれの特徴について振り返りたい。はじめに、シュモラーは倫理的な側面を加えた先駆者と言ってもいいだろう。これまでの経済学は自然の衝動や欲望のみで捉えられていたが、彼は風習などの倫理的な側面を内包した文化の世界であるとした。次に、ゾンバルトは文化的な側面における経済体制の把握を試みた。彼は3つのメルクマールによってそれぞれの経済体制の性質を総合的に明らかにする体系化を行った。最後に、ザリーンはこれまでの歴史学派の歩みをまとめ上げたと言えるだろう。彼は「直観的理論」を構

<sup>58</sup> ザーリン 1929 (高島訳)、134頁。

築し、それは合理的認識をも包括し総体的な認識を成し得た。

このように、それぞれが文化と経済を結びつける模索を行ってきた。冒頭のユニクロの例でもあったように、イスラム教徒の多いバングラデシュではカジュアルな女性服があまり好まれなかった。また、ヒンドゥー教の多いインドやネパールでは宗教的に禁じられていないにも関わらず豚肉を食さない。なぜなら、豚は汚らわしいという文化が根付いているからである。そのため、彼らは国外で食べることに對して抵抗は抱かないが、彼らの共同体内で食されることはまずない。このように、人々の行動選択がその国々の慣習や宗教に強く影響を受けていることは珍しいことではないように思う。とくに、イスラム教徒やヒンドゥー教徒の人々はそのような影響が強い印象があり、その国々は多くの人口を抱えている。したがって、グローバル化が進むにあたり、重要性が高まっている地域であると言える。だからこそ、国民・民族特有の精神的・慣習的な側面を取り入れた経済学はシュモラー、ゾンバルト、ザリーンからおおよそ一世紀の時を経て、再び必要とされているのではないかと考える。

## ＜ 参考文献 ＞

(紙ベース、五十音順)

ザーリン、E. (高島善哉訳)『国民経済学史』(原書第2版、1929年)三省堂、1935年。この訳では「ザーリン」となっているが、「ザリーン」として扱う。

シェフォールト、B. (原田哲史訳)「エトガー・ザリーンと彼の「直観的理論」の構想——戦間期において」、『四日市大学論集』第75巻第2号、2007年。

シュモラー、G. (戸田武雄訳)『法及び国民経済の根本問題』(原書初版、1874～75年)有斐閣、再版、1942年。

シュモラー、G. (正木一夫訳)『重商主義とその歴史的意義』(原書初版、1884年)未来社、1971年。

ゾンバルト、W. (向井利昌・吉筋知之訳)『経済生活の秩序』(原書第2版、1927年)、(I)神戸学院大学『経済学論集』第16巻第3号、(II)同第16巻第4号、(III)同第17巻第1号、1974-75年。

田村信一「グスタフ・シュモラーの重商主義論」、北星学園大学経済学部『北星論集』第23号、1986年。

西田英樹『シュテファン・ゲオルゲ 魂の四季』東洋出版、1993年。

原田哲史「歴史学派の遺産とその継承——ザリーンとシュピートホフの「直観的理論」、  
『思想』no. 921、2001年。

原田哲史「「直観的理論」から市民社会論へ」、『四日市大学論集』第16巻第1号、2003  
年。

原田哲史「歴史学派経済学」、金子光男編『経済思想の源流』八千代出版、2008年。

原田哲史「ヴェルナー・ゾムバルトにおける「経済システム」と発展——『経済生活の秩  
序』における「文化領域」としての経済」、『経済学論究』第64巻第4号、2011  
年。

原田哲史「リストと歴史学派」、喜多見洋・水田健編『経済学史』ミネルヴァ書房、2012  
年。

原田哲史「ゲオルゲ＝クライスにおける哲学者 E. ラントマンから経済学者 E. ザリーンへ  
の影響」、『経済学論究』第67巻第2号、2013年。

(以下、紙ベース以外)

NHK「成長か、死か——ユニクロ 40 億人市場への賭け」(テレビ番組)、2013年。